



今月の御聖訓



善なれども大善
をやぶる小善は悪道に墮つるべし

をやぶる小善は悪道に墮つるべし。

善なれども大善

〔南条兵衛七郎殿御書 一四九七頁〕

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
お講話 「不軽菩薩の行に学ぶ」	菅野憲道 2
家を守る話〔その七〕	松井照雄 10
「弟子分帳」と十七回忌〔二十五〕	松田銘道 10
ちょっと寄り道⑩〈一太郎検定の実施〉	森田観道 15
【所感発表】「求道の精神を實踐で貫き通す」	布江 允 16
恵日だより	20
六月の行事 水無月詠草 恵日俳壇 訃報	


 巻頭言

過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ

菅野 憲道

知らない街を歩いているとすぐ道に迷う方向音痴の人がいる。その原因をテレビで実験していたが、一つには目標物を近くの物や動くモノにおくため、二つには、自分を中心に周りが動いているとらえてしまうせいだそうである。

道を覚えるということは、次々としてくる情報を認識し、記憶して再構成し、頭の中で一つの地図を作り上げるのだが、この場合なるべく遠くの大きな目標を見つけて、そこから自分の位置を見定めることが大切になる。さらに、常に自分が移動していることを自覚しないと、位置関係は整理出来なくなってしまうという。

思うに、このことは仏法にも当てはまることではなからうか。人生という道でも、衣食住を満たすためだけに生きていけば必ず迷うことになる。迷わず悔いのない人生を送ろうとすれば、根本真理や哲学・理想のようなものをもつ必要がある。まして生死の道を明らかにしようと思えばこの法華経という仏道以外にはないと思う。

そこから連想を発展させると、地図を、空間のみならず、時間に展開すれば、歴史もまた地図の一種といえなくもない。芭蕉も人生を旅にたとえたが、人生経験を積み重ねながら、ますます道に迷っているのは、この過去の経験という情報を整理して人生の地図を作ることには失敗しているからだとも思う。歴史は未来を写す鏡であるというような諺があったかどうかは分からないが、個人にとっても、社会にとっても経験や歴史を検証することは大きな意味があると思う。

宗門や学会も少しは教団の歴史を検証すれば良いのだが、新生宗門とか新しき船出等といって、少しも自分達の足跡をふりかえろうともしない。いや歴史まで今現在の自分達に都合良く改竄するのだから、迷走するのは当然のような気がするのである。ここ数十年の歴史は自分たちでも正視に耐えられないのかもしれないが、現実を直視しなければ何事も始まらないことも事実である。

【お講講話（要旨）】

拝読御書 「呵嘖謗法滅罪抄」（全集二二八頁）

不 輕 菩 薩 の 行 に 学 ぶ

菅 野 憲 道

《法華經本門に立てられた大聖人の仏法》

大聖人の仏法は、法華經本門を中心にして宗旨が立てられておりますが、本門の八品には、法滅といわれる釈尊滅後の末法に、どのようにして仏法が再生され、流布していくのかが説かれます。それは大地の下から地涌の菩薩を召し出し、久遠本仏の所持する本法をその上首上行菩薩に結要付属されたことが、最も重要な意義を有することです。

このことは、朝夕に拝する十界互具の大曼荼羅の中にはっきりと示されています。いわゆる法華經の虚空会の儀式を表したこの御本尊様の相貌は、法華經の宝塔が湧現して釈尊と多宝仏が塔中に並座なされ、そこに上行等の四菩薩を上首とする六万恒河沙の地涌の菩薩が湧現して列座し、迹化の菩薩をはじめ一切の、二乗・天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄界等の一切衆生に対して妙法蓮華經を説法をされている姿であります。

この御本尊様をよくよく見れば、釈尊と多宝如来が妙法蓮華經の両側に並座される意味は、これは中尊の南無妙法蓮華經の

本仏は、釈尊お一人の姿をもっては示すことができないことを意味しています。

また、南無妙法蓮華經の下に「日蓮在御判」と認められておりますが、これは御本尊に図顕された久遠本仏世界が、大聖人の己証の法門であり、大聖人の胸中の肉団に証得せられた世界であることを示しているのであります。



二仏並座宝塔図（金字法華經）

ところで、大聖人滅後、日興上人と他の門弟の間で、仏像造立をめぐって、論争がおこりますが、果たして、法華経本門の本仏・本法が仏像という色相像をもって表現できうるものかどうかを考えたら案外分かるのではないかと思えます。仏像は眼識を通じて有限のイメージを結ぶので、到底久遠元初の自受用身という本仏を表現するには適していないのではないのでしょうか。ましては、感応道交・境智冥合という十界互具の上に三重の境智を立てる本尊観など、釈尊像をもってしては思いもよらないのであります。

いわゆる釈尊像なるものは、大聖人御入滅の際「墓の傍に立て置きなさい」と遺言された隨身仏以外はありませんし、ご一代の中においてご自身はただの一度も仏像を造立したことはないのです。弟子・檀越にも悉く、十界互具の曼荼羅を御本尊として授与されています。さらには御入滅に際しても枕頭にこの御本尊をお掛けになるようにとお述べになられました。こうした歴史的事実を見れば大聖人のご真意は明らかであり、我われも十界互具の大曼荼羅をもって、末法における唯一の本尊と崇め奉るのであります。

ところが本門には、この虚空会の儀式に現れてこない、上行菩薩とは違った重要な意味をもつ菩薩がもう一人説かれています。それが「常不軽菩薩品」に説かれる不軽菩薩です。

この菩薩がなぜ、虚空会の儀式に現れていないかといえますと、不軽菩薩は教主釈尊その人の本因修行の姿なのです。しかも、本因修行という、久遠の過去の因を示すことによって、釈尊の化導の尽きた無仏無教といわれる末法（未来）における、

時機相応の修行のあり方が示されるのであります。

そしてその法華経の予証通りに、大聖人が末法に出現され、法華経の勸持品や不軽品の経文を身読されることをもって不軽菩薩の本因修行を実証し、これをもって、ご自身が本法所持の上行菩薩の再誕たる立場を示されたのであります。

さて、そこで問題になるのは不軽菩薩です。御書中にはいたるところに不軽菩薩の語が出ており、その使用頻度はおそらく上行菩薩に匹敵すると思えますが、それはそのまま大聖人がご自身の立場を、上行菩薩と同時に不軽菩薩であると規定されていたからであります。

《本門の菩薩と大聖人》

これほど大事な法華経本門の菩薩ですが、実は日本の仏教史上、大聖人以外は、誰も気がついておりません。

仏教は、もともと鎮護国家の法として受け入れられ、飛鳥・奈良・平安を通じて、日本固有の思想や、文化として、非常に広く深く根を下ろしていきました。その日本仏教が、平安末期から鎌倉時代に推移する時期になると、末法思想を契機に本質的に一八〇度転換し、国家や体制の動揺もあって、実存的な人間に立脚した仏教の時代を迎えるのですが、そのために当時の仏教者がそれぞれに末法という時機相応の教法を模索して、禅宗とか浄土宗、律宗といったものに分立していきました。

同じ時機に、種々に分かれていった信仰形態の中で、地藏や観音・彌勒などの菩薩信仰が非常に盛んになるのです。しかし不思議なことに、法華経の一番重要な上行菩薩と不軽菩薩につ

いて触れた人は誰もおりません。法華經の觀音品をとるなら不輕菩薩とか上行菩薩をとれば良さそうなのですが、それが皆無なのです。

仏教の歴史を検証すると、この菩薩について着目されたのは、日蓮大聖人しかいません。あれほど上下一同に法華經が尊重されたにも拘わらず、その中心的な位置を占めている本門思想は手つかずで、大聖人の出現まで、ほとんど触れられていないのです。

これらの菩薩は、天台大師や伝教大師ですらあまり触れておらず、法華文句等の注釈書でも、詳細に説かれるのは迹門部分であり、本門はあまり詳しく触れていないのです。

それを大聖人が時節を合わせたように末法に出現されて、本門の行者・本因妙の行者として、三大秘法の仏法を説かれたのです。大聖人が上行菩薩・不輕菩薩に関する經文を、身をもって読まれたことには、実に仏法の因縁深重なるものを感じます。

《不輕菩薩は末法の修行の handbook》

次に、不輕菩薩がなぜ末法相應の修行の handbook になるかという点ですが、この中には種々の大事なことが示されています。

不輕菩薩は過去の威音王仏の像法に出現した比丘ですが、この菩薩は、

「我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。當得作仏（我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作仏することを得べし）」

という二十四字をもってただ一切衆生を礼拝する修行をしてい

たといいます。不輕菩薩は、すべての人々は自らの仏性を忘れてしまつて、小さな我見にとらわれ、地獄・餓鬼・畜生・修羅等の生命ばかりが現れているけれども、菩薩行によつてその生命を淨化すればもともみな尊い南無妙法蓮華經の当体であるとして、「あなた方は本当はみな仏様なのです」と礼拝して説いたのですが、多くの人は、怒りだして悪口を言つたり、石をぶついたり、杖で殴つたりと、いろいろに迫害したのです。しかし、不輕菩薩はそのような時、遠くへ逃げてそこから同じことを高声に言うという、礼拝行のみを行つたのです。

これを大聖人は「顕仏未來記」に、

「不輕菩薩我深敬等の二十四字を以て、彼の土に広宣流布し、一國の杖木等の大難を招きしが如し。彼の二十四字と此の五字と其の語殊なりと雖も、其の意是れ同じ」（全集五〇七頁）と申されており、不輕菩薩の二十四字と大聖人の五字七字の題目とは同じだと言われているのであります。このことは非常に深い意味を持っています。

まず、礼拝の対象としたのは妙覺果滿の仏様ではなく、一切衆生に伏在する仏身だというのでありますから、積尊本因成道時の本尊が十界本有の妙法蓮華經であることを暗示しているのです。しかもその修行は「不專誦誦經典但行礼拝」といって、妙法蓮華經の受持一行をも表しています。ただ余事余念なく南無妙法蓮華經を持っていくことだけで、それ以外の布施や持戒行は枝葉であるとされているのであります。

本宗における修行も、正行にお題目を助行に方便品と寿量品しか読みませんが、特にお題目を正行とすることは、ただ口に



常不輕品説相図 (金字法華經)

唱えるのみならず、受持行といって、身口意の三業に本有の妙法を受持すること、とくに身読といって、身に当てて本門の題目を信じ行ずることこそ不輕行の姿なのであります。そして妙法蓮華經を一念に受持する因のところに、仏果を納めて、因果俱時のうえに即身成仏を見て、妙法蓮華經の当体蓮華を沙汰するのであります。

《不輕行の位》

また同御書に

「彼の不輕菩薩は初隨喜の人、日蓮は名字即の凡夫なり」(全集五〇七頁)

とあって不輕菩薩は天台の立場では相似即の位と判じておりませんが、大聖人は、分別功德品に説かれた四信五品の教相を判じ

て、不輕菩薩を初隨喜の人、即ち寿量品を聞いてわずかに隨喜の心を起こした初信の位とされております。このことは末法における法華經の行者の位が名字初信の位であって、けて歴劫修行を経て高位に昇った行者ではないことを明かします。

これは、最底辺の衆生を濟度し敬うというものですから、社会的に高い地位にたつて、聖者然とした態度でいたのでは不輕行を實踐することはできません。自らもまた最底辺の衆生と何ら変わらない底下の凡夫であるという自覚に立ち、まちがっても優越感や増上慢の心、差別の心を持っていては、できることではありません。

「教弥いよいよよ実なれば位弥いよいよよ下し」といって、仏法が眞実であればあるほど、最低位の愚悪愚迷の凡夫を救うのであるから、その導師も低位をとるのであります。宗祖が「旃陀羅が子」といわれるのも、この辺の事情を物語るのであります。

余談ですが、古いサンスクリット語の法華經には、「輕しめられたる者(輕蔑された者)」という語句で不輕の語が示されているといわれ、要するに世間から馬鹿にされたり、軽く見られる人間という意味で不輕と称したんだという最近の説もあります。また、これは、詩人宮沢賢治が不輕菩薩をイメージしたという「雨ニモ負ケズ」の詩では、

「……デクノ坊ト呼バレ、苦ニモサレズ……」
と表現したことでわかりやすく、ヒーローのようにけして恰好いものではありません。

世の中には大きな教団のご立派な管長や、名僧・先生といわれる人々がたくさんいるのでしょうけれども、所詮は一般社会

の地位同様、教団という俗世間の名聞名利の地位であります。取り巻きに囲まれ、出世して偉くなったつもりで謙虚さまで失った姿は、俗世間より悪質かもしれません。

真に仏法を体現するものは、そうした地位に背を向けてむしろ常に大衆の中にあつて、衆生とともに往ずることを願っているのだと思います。一切衆生の仏性を信じ、すべての人を敬い尊敬するからこそ、それを粗末にして、誤った宗教とかつまらない人生観で貴重な人生を無駄にしている人々を、覚醒するため、常に折伏を行っているのです。

《不軽菩薩への迫害の意味》

さらにその礼拝行が折伏門に立つことは、上慢の四衆に而強毒之と云って、直ちに妙法を説き、順逆の両縁を結ばしめるのです。

滅後末法という時代は、釈尊の化導の縁尽きて、我われはまたゼロから仏法の結縁をする必要があり、そのために大聖人が出現されて南無妙法蓮華經を説かれたのです。

すなわち、宗教的な素地を持っていない現代の衆生は、南無妙法蓮華經を聞くことによって初めは反発しますが、この反発したことによって、実は大きな縁を結ぶということです。これを逆縁といいます、その縁が後々に花開いて順縁となり成仏ができると言われているのであります。

もしまったく仏法に無縁のままでは、どこまでも救われません。たとえ最初は逆縁であろうとも、縁することが最も重要なのであります。不軽菩薩を軽毀した上慢の四衆は後に後悔した

けれども、その罪によって永く地獄に落ち、罪障消滅の後法華經を受持して成仏したといわれます。此処に遅速はあれ「信謗彼此決定成仏」という法華經の成道観が示されます。

それから上慢の四衆に悪口罵詈・刀杖瓦石の難を受けるということは、不軽菩薩にも、過去世に法華經誹謗の罪があつて、それが罪障として現れるのであるという御書もございます。これは法華經に「其罪畢已」とあつて、法華經を行ずる故の忍難こそが真の罪障消滅につながることを示しております。

不軽の礼拝行は、人々には中々受け容れられず、誤解されていろいろな迫害を招くことになるのですが、実はそういう難を受けることによって、その人の過去世の業因によって受けるべき罪障を軽く受けて解消することになるということです。

どんな人でも、多かれ少なかれ罪業を持っています、その罪を何も無しで帳消しにすることは、あり得ません。自分が過去世に植えてきた悪い種は、必ず自分が刈り取らなければなりません。そのために我われが正法に目覚めた時には、自分の過去の罪障をきちんと清算し、身をもってその報いを受けなければならぬのです。その意味で、正しい仏法を修行するならば、必ず難が起きるといふのです。

このことは、いわば自身に内在する謗法の生命、増上慢・我慢という元品の無明を、正法弘通のため、衆生済度のため理不尽な大難を忍受することによって、はじめて断破できることを意味していると思います。末法の衆生には等しく過去の罪障があり、その報いとして、三毒強盛の病、増上慢の毒氣に冒されているのですから、この罪障と業報を清算して清浄身になるに

は、かならず身軽法重の経文を身に当てて読まなければならぬのであります。

これは病氣でもそうですが、治療しようと思つたら、苦い薬を飲んだり養生したり、手術を受けたり、難にあわなければなりません。放っておいたら、もっと重くなり、取り返しがつかなくなります。面倒くさくても、お金がかかっても、また痛い目にあつても、そういう難を乗り越えないと、過去の罪障は消滅できないのであります。

結局、どんな人間でも嫉妬したり怠けたりする命がありますから、我われが、正しい信仰によって本仏に感応しようという時は、内面の地獄や修羅等の命が出てきて、迷つたり混乱したりします。しかし、そういう四悪道の生命を克服した時に初めて明鏡に映すように己れの罪障を自覚できて過去世の業因を軽く受けることができるということをいわれているのです。

大聖人は「強敵を伏して始て力士をしる」(全集九五七頁)「くろがね(鉄)をよくよくきたへば、きずのあらわる」(全集一〇八三頁)といわれておりますが、信仰だけでなく、どんなものでもそれが本物かどうかは、試練を経てみなければわかりません。ただ頭の中で漠然と考えているだけでなく、実際にできるかどうかは、一つひとつの試練にぶつかつてみた時に初めて試されるのであります。

《忘れられた不軽菩薩》

しかしどういふ訳か、今の日蓮門下、特に学会などにおいては上行菩薩は強調されることはあつても、不軽菩薩はあまり取

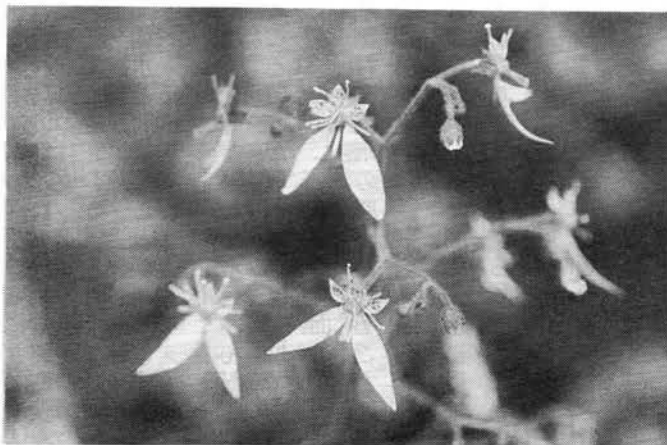
り上げません。これは不軽品に説かれている内容やその精神が学会や宗門には受け容れられないということだと思ひます。

あの人たちの謗法を折伏するという概念は、自分達の批判者への憎悪や敵愾心でしかなく、不軽菩薩によって示された依法不依人の精神とも異なり、一切衆生への慈悲の精神ともほど遠いようです。

不軽菩薩の修行の在り方は、我われが法華経の信心修行をしていく時に、必ず規範として見習つていくべきものであります。特に、不軽という名前が示すように一切衆生を心底から敬うという精神、怨親平等にすべて衆生を慈眼視することこそ肝要なのです。

「崇峻天皇御書」に、
「一代の肝心は法華経、
法華経の修行の肝心は不
軽品にて候なり。不軽菩
薩の人を敬ひしはいかな
る事ぞ。教主釈尊の出世
の本懐は人の振舞にて候
けるぞ」(全集一一七四
頁)

と仰せですが、この仏法を修行せんとするならば、必ず不軽菩薩を鏡とすることを忘れないように願ひします。南無妙法蓮華経



ゆきのした

今回は、「水回りと湿気」というテーマですが、一度に両方述べますとややこしくなりますので、分けて話しましょう。まず「水回り」ですが、屋外であれば、雨水がその対象となります。

屋根瓦は、前回に述べましたので、その先の雨樋になります。何と云っても雨



樋の大敵は詰まりです。落ち葉・ビニール・ボール等がよく詰まる原因になります。中でも付近に大きな樹木のある所では、絶えず横樋の掃除が必要になります。また、点検ですが、雨の降っていない時は分かりにくいことが多いので、多少雨量の多い折りを選んで点検することに

より、ハッキリと分かるでしょう。点検のポイントですが、正常な樋は多少多い目の雨量でもあふれたり漏れたりしません。横樋の不良の多くは「ねじれ」「受け金具」の外れ、「割れ」等々があります。また縦樋は「集水ます」の部分も含めて、よく物の詰まる所ですので、雨の日の点検をお勧めします。

また、以外と問題の多いのは、二階ベランダ（物干し場）部分です。ベランダの床面は例外なくモルタル仕上げになっていますが、その防水効果とモルタルの亀裂、排水不良等によつては、漏水は免れません。ベランダの下部が部屋取りになっている場合は最悪です。

またモルタルも、長年その上を歩いたり風雨に晒されることにより、その表面が荒れて吸水作用により湿気・漏水の原因となります。排水口の点検とともに、防水工事（防水剤塗布）とタキロン屋根を作ることに、大半は解決されますので、早めに対策されるのが、よりいっそう防水性を長持ちさせるでしょう。

次に屋内の水回りの件ですが、主な所は「浴室」「洗面所」「台所」「便所」等ですが、そのうち「台所」と「洗面所」

は水道管の漏水や排水管の詰まりが無い限り、トラブルは少ないでしょう。ただ冬季水道管に発生する結露が流れ出したリして漏水と間違ふことがありますので注意して下さい。

浴室は、元もと湯とか水をふんだんに使うところですから、排水は完璧であるはずですが、しかし、床面や壁面のタイルの目地割れや漏水の原因となることは、早めに補修修理が必要です。特に、壁面タイルの割れは、長時間の入水に壁地や床下土台回りを芯から腐らしてしまいます。また悪いことには、入水や漏水は浴室内からは分かりにくいものです。それだけに早い手入れが必要なのです。なお、機会があれば床下から浴室周辺の点検をされることをお勧めいたします。

それと、浴室のドアは必ず浴室内側に開ける内開き式にしたいものです。もし外開き式になっているとドアの内側に付いた水滴や浴室で使う湯水の飛び散りがドアに当たってそのまま外に伝い流れ床板をいつも濡らす結果になるからです。

また直接この項には関係ありませんが、浴室ドアの中棧タイプでも上下全面ガ

ラスのものがありますが、出来れば下部のガラスをパネル板に取り替えたいものです。その理由は、濡れた床面において石鹸・洗剤等に滑って顛倒し、ガラスが割れての事故が近年多くなっているからです。それだけでなく、日本式の一般家庭の浴室は狭いので、ただのガラス戸でも危険な物に変わることがあります。

次に、湿気の問題ですが、実際水回りのことよりも厄介なのがこの湿気の問題なのです。前にも述べたように、最近の家屋構造は機密性が高く、特に鉄筋構造のマンション等はその極みであると思います。暖房等熱源の豊富さと、機密性の高さ、この相反する条件をどこで折り合いをつけても、湿気の問題は出てきます。湿気は通風をよくすればかなり防ぐことはできますが、それに重点を置きすぎますと暖房効率が悪くなり頭の痛い問題です。

では、何処に多くの湿気が溜まるのでしょうか？それは、外の気温と内側の気温の差の高い所、つまり窓ガラスや外壁に面した風通しの悪い内壁等です。これは皆さまの家庭で実証済みのごとく、朝になると窓ガラスに結露が水を流したよ

うになっている所や、押入の中の物が濡れたようになっていいる所が、湿気の溜まり場です。ではその防護策はあるのでしょうか？。結論的にいって、決定的な対策がないのが現状です。しかし、多少なりともこうすれば、といえる事々を考えたいましよう。

まず窓ガラスの方ですが、最近結露吸水シートが市販されています。これは片面に接着シールの付いた三・四センチぐらいの厚手の吸水布で、これをガラスの内側下部に貼り、結露を吸い取るという物です。これで昼間は自然乾燥し、翌朝また吸水を繰り返す単純なアイデア商品ですが、これが現在最良の策のようです。

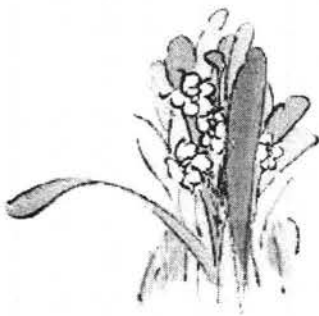
そして、次に押入ですが、湿気で一番困るのがこの押入のようです。対策ですが、元壁部分に空間を作ることが大切です。壁の前に二・三センチの空間を作れる簀（す）の子状（格子形）の板を立てて、物を直接元壁につけないようにし、たとえ少しでも空気が動くよう、つまり風が通るようにすることがベストです。それには許せる限り押入の襖を両方少し開けて通風させることです。湿気が入り

込んでもすんなりと引き出す工夫が肝心です。また押入専用の吸水型防湿剤も有効でしょう。

なお、あまり使わない部屋や留守がちな家がヒヤーッと寒く感じるのは、湿気の滞留による物で、部屋の襖を少し開けたり、床下の通風をよくしたりすることは、湿気から家を守る点においても大切なことですので、点検と関心を持つようにしましょう。

個々の解決策はある程度あっても、トータルでの完全な策はありません。機密性を重点に置きすぎますと、湿気や空気の汚れ等の問題があり、乾燥性の高い暖房機器を使いすぎますと身体に悪影響が出ますので、通風喚起が必要となるなど、十分に思うようなコントロールができず、冷暖房業界や建築家業界で当分課題となりそうです。

今回は「家庭で使える道具と使い方」です。



「弟子分帳」と十七回忌〔二十五〕

松田銘道

又、「立正安国論」と日興上人（続き）

次に八幡大菩薩の神徳靈験を主に記した「八幡愚童訓」乙についてみてみます。乙で注目されるのは、八幡大菩薩の本地に関する記述です。「本地事」には次のような託宣が記されています。

「弥陀とは、御託宣に、『吾本国は西方にあり。極楽浄土是也。有縁の衆生を神民として極楽に往生せしめむとなり』と告給て、行教和尚の袂にうつり給へるも弥陀の三尊なれば、阿弥陀如来、大菩薩の本地にてまします条もうたがひなし」（『寺社縁起』所収「八幡愚童訓乙」二二六頁）

ここには、八幡大菩薩の本地が阿弥陀であると記されています。そしてその阿弥陀は石清水八幡宮に鎮座しているとの理由が、次のような託宣で語られていき

ます。

「空也上人、夢に極楽世界に参給へるに、華池宝閣・菩薩聖衆の有様、図絵の万荼羅にすこしもたがわざりしに、教主計は蓮台のみありて御身なし。上人問て云、『教主何処に御座するぞや』。聖衆答云、『娑婆にまします也』。又問、『娑婆とは何所ぞや』。答云『日本国石清水男山也』。爰上人夢覺て、頭をかたづけ手をあわせ当社に参詣して、念仏三昧を得給へり。然ば弥陀は大菩薩の御本地なる事うたがひなし」（同）

そもそも八幡大菩薩の本地が阿弥陀であると称し始めたのは、平安中期ごろまでさかのぼるといわれていますので、ここに見るような託宣は、この時期多く語られていたのかも知れません。それでも

八幡大菩薩の本地を釈迦仏とした宇佐八幡宮から勧請した石清水八幡宮において、わざわざ阿弥陀へと本地仏を変えていったことは、その背景に何があったかを含めて興味ある問題です。

石清水八幡宮においては、宇佐八幡宮にて本地仏を釈迦に定めていたことを意識しつつ、同じく法華経に本地仏を求めながらも、その本地仏が釈迦ではなく阿弥陀となることを、次のように意義付けています。

「昔宇佐宮にして釈迦と託宣し給へる、是法華迹門の始成正覚の尺迦如来也。

今石清水にて弥陀と示現し給へる、即法華本門の無量寿仏なるべし……釈迦の本懐、弥陀の本誓ともに蓮華なれば、二仏同躰、人法不二にして、法華の始終我神の本地なるべし」（同二二七

(頁)

ここには、

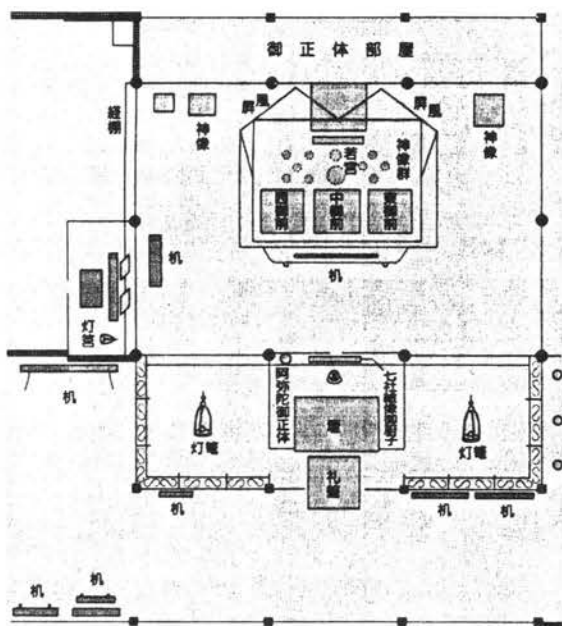
a、宇佐八幡宮の本地釈迦は法華經述門の始成正覚の仏であること。

b、石清水八幡宮の本地阿弥陀は法華經本門の無量寿仏であること。

c、法華經本門の阿弥陀は、本門の釈迦と二仏同体で、人法不二であること。

以上が阿弥陀を本地仏と定めた根拠としあげられています。

左にかかげた図は、文明十八年(一四八六)石清水八幡宮が朝廷に報告した神



石清水八幡宮神殿内部の配置図 (『週刊朝日百科』)

殿内部の祭神の配置図で、創立以来の様子を知る重要な資料とされているものです。

この配置図に示されているように、僧が読経、祈祷する礼盤の前に阿弥陀が安置されています。ちなみに内陣中央の中、東、西の各所には、応神天皇、神功皇后、多岐津姫命がまつられ、応神天皇は僧形像での安置となっています。

配置図が創立以来の祭神の形態を示したものであれば、阿弥陀の安置そのものは、阿弥陀を本地仏と称し始めた平安中期ごろまでさかのぼるの可能性もあります。

そうすると、乙の作成時期は阿弥陀の安置よりかなり時代が下がることになりませんが、それだけに乙にてわざわざ阿弥陀の本地を法華經の本門の無量寿仏と定めていった目的がいつそう興味ある問題となつてきます。

萩原龍夫氏はその目的は次のようなものであったとする見解を示しています。

「おそらく八幡愚童訓甲の原型の

ものあとをうけて、八幡信仰を庶民にもなじみ深い阿弥陀信仰(多分に天台浄土教的のもの)に結びつけ、宗教的根拠を明示しようとしたのであろう。

その場合、宇佐宮にはもとから釈迦を本地とする説が有力であったから、本地阿弥陀を押し通すには調整が必要であった。そこで本書『本地事』では、昔宇佐で釈迦としたのは法華述門の始成正覚の釈迦で、今石清水で弥陀とするのは法華本門の無量寿仏を示すものだとし、弥陀釈迦仏一体説を打出した(「神祇思想の展開と神社縁起」四九五頁・日本思想体系「神社縁起」所収)

ここでは、阿弥陀を本地仏とした乙でのa、b、cと展開していくその目的が、八幡信仰の拡大にあり、しかもそれは天台浄土的な弥陀信仰の受け入れであったとする見解が示されています。

このことは、乙が作成されるその時期——正安三年から嘉元二年——に、日興上人が法華經の本門の立場に立って神天上法門を展開されていたその法華本門思想とは、法華本門の釈迦の否定と、そこに

阿弥陀を混在させているという二重の過ちが展開されています。

乙での阿弥陀を本地仏とし、しかも法華本門に無量寿仏を定めるとの異流儀は、それだけ弥陀本地説が広く民衆に受け入れられていたことと同時に、法華経がいかに軽視されていたかを物語っています。弥陀本地説は、大聖人もたびたび破折し続けられていた問題です。例えば、弘安三年の書状「智妙房御返事」には次のように述べられています。

「世間の人人は八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と申すぞ。それも中古の人人の御言なればさもや。但し大隅の正八幡の石の銘には、一方には八幡と申す二字、一方には昔靈鷲山に在て妙法蓮華経を説き、今正宮の中に在て大菩薩と示現す等云云。月氏にては釈尊と顕れて法華経を説き給ひ、日本国にしては八幡大菩薩と示現して正直の二字を誓ひに立て給ふ……今日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生、善導・恵心・永観・法然等の大天魔にたぼらかされて、釈尊をなげすめて阿弥陀仏を本尊とす」（全集一二八六頁）

ここには、

a、阿弥陀本地説が以前から広く受け入れられていたこと。

b、大隅の正八幡の石の銘を根拠として弥陀本地説が破折されていること。

c、aの受け入れが法然等の教えによっていたこと。
以上のことが記されています。

ここにおけるbの阿弥陀本地説の破折については、鶴岡八幡宮の焼失―弘安三年十一月―がきっかけとなつての展開であることと、その焼失が八幡大菩薩が「宅をやいてこそ天へはのぼり給いぬらめ」（同）と、天に去つたことを意味していることとされていること、このことに加えて鶴岡八幡宮の八幡大菩薩が石清水宮からの勧請であることから推するに、鶴岡八幡宮でもaの弥陀本地説が受け入れられていたのかも知れません。

この推測は、次の上横手雅敬氏の一文からも懐くことができます。氏は鎌倉大仏が造立される意図や背景について次の



鎌倉の大仏

ように述べています。

「念仏僧浄光は勸進によって阿弥陀大仏を造立したが、幕府はこれを全面的に援助した。大仏は式目制定の六年後に着工され、最初は木像であったが、のちに銅像に改められ、泰時の孫・時頼の執政権に完成した。これが現在の鎌倉大仏と見られている。浄光は、聖武天皇による奈良東大寺の大仏に対して、新たに坂東に大仏を造る意義を述べ、これを『東土利益の本尊』としている。

ここでも、海内の本尊である東大寺大仏に対して、新大仏を坂東の本尊、

坂東の宗教的中心とすることによって、

宗教面での自立を達成しようとする意図が見られる。泰時が律令を意識したように、浄光も東大寺大仏を気にせざるを得ない。日本の仏教は朝廷とかわりを持って発展してきたのだから、霊地は都の近辺に多い。しかるになぜ坂東のような『辺国』に大仏を造ろうとしているのかを浄光は説明する。浄光が大仏造立を発意したのは、鶴岡八幡宮での夢のお告げによるが、かれは、八幡神が坂東こそ弥陀の利生にふさわしい地と見ているのだとして、泰時と同様に坂東の自負を語っている」(中世の光景所収「公家の論理・武家の論理」一二〇頁)

少し長い引用となりましたが、ここには鎌倉に阿弥陀の大仏が造立されていく経緯と、その意図がわかりやすく論じられています。なかでも造立の発意が、鶴岡八幡宮の八幡神が鎌倉を阿弥陀の利生にふさわしい地と告げたことよって、空也の夢のお告げによつて阿弥陀を本地仏と定めるとの託宣ともよく似通つていま

す。

念仏僧浄光による大仏造立も、大聖人が破折されている。そのものの流れであり、また、その影響が乙での法華本門思想にまで阿弥陀が位置づけられていくことにもつながつていったのではとの、推測もできます。

日興上人は、「安国論問答」にて「立正安国論」の「釈迦の手指を切りて弥陀の印相に結び」(全集三〇頁)との一文に関して、次のような事例を示して阿弥陀本地説を批判されています。

「東大寺大佛は臺上ルサナ(盧遮那)

十六丈釈迦花嚴教主也。平家大政入道

焼失後弥陀に改造也。日本国々符寺は

聖武天皇御願也。御女父願を果して孝

謙天皇六十六丈の釈迦を造立し奉ると

誓い。然るに一体に造る事叶わざるの

間六十六ヶ国に国符寺毎に立て、父聖

武の御願を果して帝位に即、孝天皇是

也。今日本国府寺は或は阿ミタ或は葉

師也。先王に違ふ失之れ有る歟。又相

模国森入道釈迦御手を切つて弥陀にな

す。此の如き事勝計すべからざる歟」

(『興全』一〇頁)

ここには、

a、東大寺大仏が治承四年(一一八〇)、平清盛の五男・重衡が南都を攻めた時に罹災し、その後の修理において阿弥陀に改造されたこと。

b、孝謙天皇(七四九―五八在位)が父聖武天皇の御願を果たして建立した国府寺(国分寺)に安置されていた釈迦が、阿弥陀や葉師へと変わつていったこと。

c、森入道(『興全』の頭注では、毛利入道西阿こと毛利季光か、としている。評定衆を務めた鎌倉幕府の要人)が、釈迦の手を切り取つて阿弥陀に変えたこと。

以上の事例が示されています。

aの大仏の再建は、国家的事業として翌年には再建に着手し、大仏及び大仏殿が修復されます。すべての工事が完成したのは、二十二年後の建仁三年(一一二〇三)のことです。この期間に源頼朝は二度上洛し、その供養に臨んでいます。その上洛には政治的支配権を高めることもその目的としていました。

この再建にて毘盧遮那から阿弥陀へと

その印相が改造されたとする他の文献を手にすることができませんが、日興上人の記述からそんなに時代がさかのぼる事例でもないだけに、この指摘は注目できます。

bの国分寺の問題は、大聖人が「あまりの物のくるわしさに、十五日を奪い取って阿弥陀仏の日となす。八日をまぎらかして薬師仏の日と云々」(「智妙房御返事」全集一二八七頁)と、釈迦の誕生の四月八日と入滅の二月十五日を、それぞれ阿弥陀と薬師の日と称して、釈迦を蔑ろしていると指摘されたその問題と同じです。

cの森入道は、法然の弟子で長楽寺流の開祖の隆観を師と仰いでいて、『興全』の頭注で指摘しているように、隆観が奥州へ配流となった嘉禄三年(一二二七)の法難の時、その護送の任に当たって隆観を自領の相模の飯山に留めて保留し、奥州には弟子を代行させたというエピソードが伝えられています。

こうしたことから、熱心な念仏者の間では森入道のように「釈迦像の手指を切つて、弥陀の印相に改める」ということ

が、日常的に行われていたのではないが、そんな推測さえできます。

以上の中で、aやbは日興上人や門下の方々が直接見聞できる状況での問題指摘であり、またcは直接見聞できなかったとしても、同時代における出来事であり、その問題指摘は現実性をもったものです。

阿弥陀を本地仏と定めていくとする具体的事例を、抄録の書である「安国論問答」にわざわざ日興上人が注釈されていることから、八幡大菩薩の本地が釈迦から阿弥陀へと位置づけられていった問題をどれだけ重要視されていたかが知れます。

なかでも、乙の述作背景にみられる阿弥陀を法華本門の無量寿仏と定めていくことなどは、法華経本門の教えの混乱と、神天上法門を曖昧化させていく問題と受け止められていったのではないか、それは乙の作成時期が、日興上人が「弟子分帳」を著されてから間もなく一三年から六年—のことであるということからも、そうした想いを強くすることができます。

(正覚院主管)

【水無月詠草】

〔橋本義一〕

日銀の 幹部逮捕に メス入るる
東京地検に 拍手送らん
とけて消ゆる 雪の祭りにかける資金
飢えに苦しむ 世界の子らに

〔橋本 圓子〕

暴行の 白人警官 無罪なる
黒人差別は いまだ消えざり
黒人の 陪審員なき 裁判は
片手落ちなる 思いぬぐえず

【恵日俳壇】

〔宮下 留代〕

盆栽も 皆新緑となりけり
敬の里ピンクの花弁 花水木



ちよつと寄り道 ⑧

一 太郎検定の実施

伯耆の里 もりたかんどろ

パソコン教室を開設した年に、ジャストシステムで一太郎教室という制度がはじまった。これは一定の条件を満たしたパソコン教室に、ジャストシステムがお墨付きを与えるものである。さいわいにも開設時によそのお寺さんから遊んでいるパソコンやプリンタをいただいていたので、パソコン五台以上、プリンタ三台以上という最低条件をクリアしていたし、いろいろと特典も多いので、早速申し込みをした。

この一太郎教室が正式にスタートすると大手のパソコン雑誌にその広告が載った。全国の一太郎教室の一覧が、それこそ虫眼鏡がなければ見えないほど小さな

字でその教室名と電話番号が印刷されていた。全国で何百という数だから字が小さいのはやむをえない。ところが山陰地方は何かにつけてのんびりしているのだろうか、鳥取、島根の両県ではわがほろき塾だけであつた。

その広告を見て、ある日、県内の若い女性から電話があつた。

「一太郎検定を受けたいのですが、そちらでやっていますか？」

「せっかくですが、うちは一太郎検定の方はやっておりません」

「鳥取県で一太郎教室は、そちらだけです。もし、そちらでやっていただけなければ、大阪か広島まで行かなければならないんですが・・・」

「ええそうですね。でも・・・」

「何とかお願いできないでしょうか」といったやりとりで押し切られて、一太郎検定の方もすることになった。二、三

時間の試験のために遠方まで行くのは、たしかに気の毒な気がした。それに一太郎検定会場になるには、うちの場合、試験官としての研修を受けるだけでよかつたから、折れるのも早い。

一太郎検定は一太郎教室制度の少し前から実施されていて、一太郎検定協会が受験者の技量と知識について審査するものである。試験は三級、二級、一級に分かれる。この検定試験が年に三回ある。その実施マニュアルが実に懇切丁寧で立派だ。一太郎のバージョンごとの手順や、万一のトラブルの対処法も明確に書かれている。そのマニュアルにしたがつて事前に念入りにパソコンやプリンタの動作をチェックして、万全の体制で望む。

試験がすんで一ヶ月ほどすると一太郎検定協会から可否の通知がくる。受験者の合格認定書を手にすると、やはりやつてよかつたなあと思う。(大安寺住職)

〔所感発表〕(要旨)

求道の精神を實踐で貫き通す

高槻地区 布 江 允



布江允さん

「生涯、正信を求めよう」というテーマに沿って、私の所感を申し述べたいと思います。高槻には五・六年ほど前に、宗門側の妙恵寺へ去っていった一グループがあるのですが、この人たちが、あちらの折伏シーズンになるとよく私の家に来てくれます。彼らに話を聞くようにしているのです。また先年は、十数年間この源立寺でお世話になってきた、あるご婦人が、「私は大石寺の板御本尊様の信心を息子に法統相続させたい。息子はそれで良いと言ってくれまして」と言っていて、手紙ともいえぬ紙切れ一枚を私によこして、ご住職に挨拶もなしに源立寺を去っていきました。

私は、これまで私たちがご住職から教わってきた本尊観を話しましたが、そんなものは耳には入りません。「私はそんな難しいことは分からない。私はただ板御本尊だけ、それだけ。それに源立寺の御住職の講話を聞いているあいだ中、このお寺は、これまでも私たちがご住職から教わってきた本尊観を話しましたが、そんなものは耳には入りません。「私はそんな難しいことは分からない。私はただ板御本尊だけ、それだけ。それに源立寺の御住職の講話を聞いて

と見せかけの猥下が揃っているだけで、「宗門から外れたものはすべて邪宗だ、板御本尊は生身の大聖人様だ、これを所有している宗門から外れば血脈が切れるんだ」などと、相も変わらず馬鹿なことを言い回ってきます。昔はこの板御本尊はお蔵(御宝蔵)に納められて外から遙拝し、特別な時にだけ内拝を許されたと聞いております。法義の上からいえば戒壇の御本尊は、熱原の法難を機に日蓮・日興が師弟不二の信心のうえに顕現され、大聖人さまが師(仏)の立場で、日興上人が弟子(衆生)を代表して師と弟子が境智冥合して一念三千の法門を表したという意義深い大曼荼羅です。だから正法正義の根幹ともいうべき、師弟子の法門の裏付けを忘れて、ただ板曼荼羅を独占して拝してもまったく意味がないわけです。

師弟不二とか師弟子の法門ということは、弟子に法義上の間違いがあった場合に、師が弟子を糾すのは当然ですが、もし師に間違いが生じた場合、弟子から師をも糾すことが出来るという、大石寺の正法正義を守るための民主的かつ合理的な法門です。

私は妙恵寺に走ったグループに師弟不二の法門・師弟不二の本尊の破壊者である日顕さ

のですが、もともと源立寺にいた仲間ですし、別に彼らと喧嘩する必要もありませんから、こぼむことなくお茶の一杯も出して、いろん

やめました。これら宗門側に走った人たちは、板御本尊

んを責めたことがあるのですが、それに対する彼らの反論はこうでした。

——大石寺は、今は間違つて居るかも知れないが、七百年続いてきたということは大変なことなんです。その間には謗法の山と化してしまつた時期があるのも事実でしょう。しかし、ちゃんと正常に戻つて七百年続いて来たのは、大石寺の師弟子の法門がちゃんと働いてきたということですよ。

例えば本山十七世の日精上人は邪宗の京都の要法寺から迎えられたのは事実です。しかし、お山が京都風に染まらなかつたということとは、周りの弟子達がちゃんと伝統の法義を守つて、日精上人をお諫めしたんです。師弟子の法門がちゃんと備わつていたからです。だから日蓮正宗の傘下から外れてしまうと、初めは正しくても何時しかだんだんと曲がつて行き謗法と化してしまふのです。日顕さんは今は間違つているかも知れないけれども、宗門には現状を憂いている御僧侶もいるはず。その弟子達が日顕さんを諫めてくれるはず。色々なことがあつても七百年続いてきたのです。大石寺は腐つても鯛ですよ。宗門に戻りなさい——と言われて、すぐ傾いてしまふような私ではないはずなのに、正直

いいまして「ぐらつっ！」とききましたね。

でもこの「本山には師弟子の法門がちゃんと備わっているから」という言葉にだまされてはいけません。本山では猊下を法主上人といいますが、法主とは日蓮大聖人お一人なのです。日顕さんは「法主である私に背いて唱える題目には功德がない」などと今日蓮的な発言を絶えずしており、師弟子の法門の片鱗も見られません。いまや宗門の法義は麻の目の如く、乱れに乱れており、富士の法義に違背しているのです。

それどころか、現在の本山は日顕さんを頂点として、とりまきの弟子達までが上意下達の体制で、正法正義など存在しません。現在のようない強い金力・権力指向と信心を失つた状態では、荒廃したお山に富士の清流が流れるのは何十年何百年かかるか分かりません。そんな本山に行つたとて、成仏できる保証はありません。私は「我々は正信会の立場で、生涯大聖人の御心を、宗開両祖の御精神を求道してゆきます」といつて、その場は分かれました。

この即物的本尊観、血脈観は広宣流布観をもゆがめてしまいました。即ち人の数にこだわつた量的広宣流布観に陥つたわけ。そ

の結果多人数を収容する巨大な正本堂の建築となりました。

昨今も宗門機関誌の大白法には、盛んに「新大客殿完成記念登山、十万人達成！」などと、どうだと言わんばかりの、学会の向こうを張つた一面記事が掲載されていて、相も変わらず学会の二番煎じです。こんな宗門が、今後すみやかに清流を取り戻すはずはなく、その兆しは今から見えております。

といいますのは、高槻の妙恵寺では、間違つた広宣流布観をもつ元学会員の信者を、住職には指導する力がないので、私の同級生が教学から信心指導までやつており、住職は隅っこで小さくなつていふ話です。つまり指導はもとの学会員任せでお寺は第二の学会にのつとられ、これがさらに続けば僧侶軽視が進み、再び自界叛逆の難が待ち受けるものと推測されます。

源立寺から引つ越したグループが言うのには、妙恵寺は今や学会そのもので、私達は源立寺を知っているのですからまったく「頭破作寺へ行かないのです」といいながら、こちらへ折伏に来ているのですからまったく「頭破作七分」の状態です。我々も彼らの意見をしっかりと破折しつつ、見守つて行きましょう。

さて我が源立寺の法華講ですが、正信覚醒運動はその勃発当初を頂点として、勢いがなくなってきたことを率直に認めなくてはならないと思います。

その理由はいろいろあると思いますが、一言でいえば、平生に「実践」の二文字が欠けていたということで、その点を素直に認めて反省したいと思います。

実践といいますが、まず第一は唱題です。ところが我々は（私も含めて）題目があがっていません。中には上げて来られた方もあるでしょうが、全体に上げてこなかったという方が正解ではないでしょうか。

その題目もご住職が仰せの通り、我がエゴを膨らませる題目は排除すべきは勿論であります。題目は仏祖三宝尊に対する感謝の唱題を根底に置いて、広宣流布を目的としなければ長続きしません。まず心の浄化を願い、そして随力弘通で妙法を讃歎していくべきだと思います。広宣流布とは自身の成長、いいかえれば自分の成仏と、もう一つには利他の実践にあると思います。

これは法華経を我がこととし、自分は地涌の菩薩の眷属なんだと、自分は法華経を大聖人様の仏法を広める使命があるという、自覚

ある有志の人が自発的に題目をあげてゆこうという提唱であります。

第二には折伏です。私はなにも、「組織で足並みをそろえて」と提唱するつもりはさらさらありません。

ご住職は「お寺や講から、折伏を強制指示はできない」「講員の自主性を無視して、命令すること

はよくない」といわ

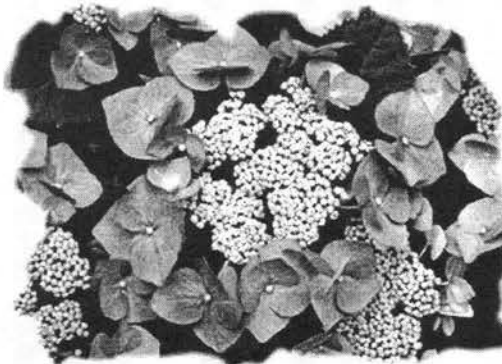
れますが、それはその通りであり

ますし、また、実践を組織命令で呼びかけることも問題

があります。それが個々の自覚の問題であることも承知しております。

しかし、我々には「折伏」といえば「創価学会的強制勧誘」という雰囲気があつて、意識的にタブー視してきたような気がします。

「美あつちのに懲りて膺なますを吹く」といいますが、折伏を否定することは、諸法実相抄の「我を



もいたし人をも教化候へ、……力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」の御聖訓を引くまでもなく、これをタブー視するのは明らかに誤りです。

また、「法自ら弘まらず人・法を弘むる故に人法ともに尊し」とも仰せであります。折伏といつても、学会のようにいやがる人を無理矢理引つ張り込むものではありません。だれにでも一人ぐらいいは、この仏法の話をして上げたい人がいるはずで、その人が、たとえ今生では縁が開花しなくても、毒鼓の縁で来世にこの仏法に結実すればいいわけです。

この折伏ですが、例えばご住職は毎月必ず講話をして下さいますが、僭越ながらそれはご住職の随力弘通の一端だと思えます。また、我々も商売や事業等を通じて、経済活動で法華経を弘通される方もあります。家庭を守り、子供を立派に育ててこの仏法を法統相続させるといふことも大切で、どこにでも随力弘通の場はあると思います。私は年寄りで身よりもありません、何の力もないから題目で折伏の応援をさせてもらいますというの、立派な随力弘通だと思っております。また、「信心は折伏を第一義」としてこられた方もおられるでしょう。その方々が折伏に応

分の力を發揮されるのも随力弘通でしょう。

私は何も組織力で折伏をやろうというのではなくて、そういう自主精神の確立がここに来て、各自に必要なのではないかということに訴えたいのです。もちろん自行化他ですから自行が先行するの言うまでもありません。自身が南無妙法蓮華經と唱え、磨きに磨いて、「力あらば一文一句なり人に語らせ給へ」ですから、自行と化他が車の両輪のようなバランス感覚の上に立った実践が望まれると思います。自身を磨き、その上で言動には重々自戒すべきはいうまでもありません。

法華經には広宣流布が進めば「三類の敵人あらわる」と書かれています。今のお茶を濁したような信心では、三類の敵人が現れるはずはありませんし、三障四魔も現れません。御書に「この法門申すにはかならず魔出来すべし、魔きそわずば正法としるべからず」(兄弟抄)とあります。また「謗法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべしはかなし・はかなし」(曾谷殿返事)ともあり、正信会の僧俗が真劍に弘教の精神に立ち上がれば、必ず大きな障魔が現れるのは、御書に照らしても必定です。

大聖人様は不輕菩薩の跡を継承する、と仰せであります。人に冷笑され、馬鹿にされて、それでもなお法華經は「後生の恥を隠す衣なり」との確信を抱いて、柔和忍辱の衣をつけて利他行に励まれたのです。我々もその仏道修行なくして人格完成への道はありえないと思います。御書を拝読するにも身・口・意の三業で拝読しなければなりません。

大聖人は嵩が森にて立宗宣言後、二十年間如説修行を重ねられました。その間、勸持品の二十行の偈の文を身読され続けて、その結果、ついには、竜口の刑場で死罪となり発迹顯本されました。それは法華經の行者としての自覚に立たれた死身弘法の戦いでありました。

我々が大聖人の眷属となるならば、弘法のために不借身命の精神を厭うては広宣流布などは到底不可能であります。いずれにしましても、いろんな個性の人が一つの縁を結び、広宣流布が出来るのだと思います。これを随力弘通というのではないのでしょうか。

その上で私は今、正信を貫くのではなく、正信を求めぬく、要するに「求道の精神を貫き通す」という結論に達しました。正信を貫くということには、すでに自分のしていることが正しい、という思いこみがあつて、独善

に変化する可能性があります。この求道の姿勢にすべてが集約されていくと思います。

自分の信心が大聖人様の御心に叶っているのか、宗開兩祖の御精神はこれでよいのかと、絶えず問い求めて行く姿勢だと思えます。それが求道です。

中学生が刃物を持ち、先生や警官を平気で殺す時代です。今の世こそ正法が求められているのです。宗門や学会を糾すことはもちろんですが、我々正信会の僧俗は世間に対して、広く仏法を弘めていくことが大切だと思えます。

最後に「寂日房御返事」を拝読しまして、言い尽くせなかつたことを、察していただきたいと思います。

「かかる者の弟子檀那とならん人々は宿縁ふかしと思て、日蓮と同じく法華經を弘むべきなり。法華經の行者といはれぬる事はや不祥なり。まぬかれがたき身なり。彼のはんくわい(樊噲)・ちやうりやう(張良)・まさかど(将門)・すみとも(純友)といはれたる者は、名ををしむ故に、はちを思ふ故に、ついに臆したることはなし。同じはずなれども今生のはぢはもののかずならず。ただ後生のはぢこそ大切なれ」(全集九〇三頁)

恵日だより



法華講全国大会参加者が記念撮影

第二十二回法華講全国大会

五月十七日(日)午後一時

北海道をのぞいて、日本列島はすべて雨の予報がでたこの日、源立寺からは二十五名の参加者が、千葉県文化会館を目指した。うち十七名の集団は、JALの機内放送でも、東京は雨との報告を聞き、着陸前から傘を手にして到着を待った。

しかし、曇天ながら降ることとはなく、モノレール、JR線と何度か乗り換えるうちに、薄日の射す天候となり、会場周辺には新緑の草いきれが漂うまでに回復した。

例年の大会と違うところは、ご住職が講演をされたことで、当講中の参加者にとっては、お講とは別の面持ちで

【祝ご結婚】

〔三田市〕

新郎 後藤光雄さん
新婦 のりこさん

去る四月十一日御両人が、源立寺の御宝前にて挙式されました。末永く幸せをお祈りします。



ちょっと緊張してますか…？(会場内で)

熱心に、お話を聴き入っていた（詳細は
継命新聞）。

日帰り行程とあって、少々あわただし
い面もあったが、天候にも恵まれ全員無
事に帰阪することができた。

立宗会・お虫払い

四月二十八日（火）午後一時

連日すがすがしい気候が続き、まさに
お虫払い日和ともいうべきこの日、午後
一時より法要は始まった。中央正面に日

第二十八回源立寺法華講総会のご案内

第二十八回源立寺法華講総会が、六月十四日（日）午後一時より開催さ
れます。

法華講総会は、日頃の信仰体験を発表したり、他寺院のご僧侶による講
演などに、改めて自身の信仰を見つめ直す、よい機会となっています。ど
うぞ他に優先してご参加下さい。

なお、今回は群馬県赤城法華堂、下道貫法師がご講演されます。

興上人の真筆本尊が奉掲されると、左に
大聖人御影、右に日興上人御影、さらに
六世日時上人の真筆本尊、と順を追って
御本尊が奉掲された。

ご住職からは源立寺がむかし、大阪市
内の長柄に在ったころ、大聖人真筆の御
本尊が護持されていたが、北区の蓮華寺
が火災に遭ったおりに同寺で焼失し、そ
の時に源立寺に保管されていた、蓮華寺
重宝の日興上人真筆本尊が、現在まで護
持されてきた経緯が説明された。

そして御真筆本尊も年月と共に損傷が
進み、やがて消滅のやむなきに至るは必
定であるが、だからこそ現存する御真筆

の調査や、収集管理には最大の努力を惜
しまぬよう、今後とも心がけるとの言葉
が述べられた。



お風入れの間は自由に拝観できました

【訃報】

〔箕面市〕
随法院正憲信士 五月九日寂
俗名 小西利憲之霊 行年 七十八歳
〔此花区〕
浄楽院妙代信女 五月十九日寂
俗名 谷垣加代子之霊 行年 五十一歳
謹んでご冥福をお祈りします。

六月の行事

- 一日(月) 午後二時 お経日
- 七日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会
- 八日(月) 午後二時 広基寺お講
- 十三日(土) 午後一時 お講
- 十四日(日) 午後一時 第二十八回法華講総会
- 二十八日(日) 午後二時 法華経講義

※六月一日の継命新聞の発送は『箕面・高槻』が担当地区です

今月の宅お講

- 五日(金) 午後一時半 高槻地区(橋本義一宅)
- 六日(土) 午後一時半 緑丘地区(小林国人宅)
- 十二日(金) 午後一時半 旭丘地区(初田仁宅)
- 二十日(土) 午後一時半 槻木地区(佐久間勝治朗宅)
- 二十三日(火) 午後一時半 宝塚地区(荒川静子宅)
- 二十七日(土) 午後一時半 大阪地区(小熊勇宅)

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします

恵日

平成十年六月号 通巻四十号
平成十年六月一日発行

編集兼
発行人

菅野憲道
恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内
TEL(〇七二七)五一一三三三五
E-Mail: gen@wombal.or.jp
BBS: PXH05170 (NIFTY) BMC92733 (PCVAN)